

論壇時評

〈上〉

中韓両国の外交的抗議をほじめとして、アジア諸国に深い波紋を投げかけた教科書問題は、この夏の論壇の主役でもあった。すべての論壇雑誌は、この問題に大きなスペースをさいてゐる。

教科書問題は決して新しい問題ではない。それは保守党による「偏見」教科書攻撃がはじまって以来、この四半世紀間ずっと持続してきた問題であり、とりわけ自民党の圧倒的勝利を背景に、この二、三年と激化された検定をめぐめる問題は、繰り返して報道された議論されてきている。しかし、この二、三年間の批判を無視して、いつけてきた政府・自民党が、ひとたび中韓両国からの外交的抗議にあつて、手のひらを返したように問題個所の修正と善処を約束する。そのことがこれまで文部省の検定を推進しているいは支持してきた側、批判してきた側双方の感情を奥深くところで刺激し、さまざまな論議を噴出させていることであろう。

面曰くことは、この保守・革新入り乱れた議論の中で、政府の対応を正面から擁護しているものがほとんど見当たらないことだ。論壇誌にのつたものではないが、衛藤藩吉が「大国の襟度」として「ならぬ勘忍するが勘忍」と説いている（「サンケイ新聞」八月七日）の、NHK解説委員長山室英男が、終戦

つた検定をこれまで長期間にわたって強行してきたことの責任が、当然、問われなくてはならない。そうではなくて不当な言いかりであるとするなら、それは拒否されて然るべきである。この両者の論理にはさまれて政府は、ひたすら「外庄」を理由に「ならぬ勘忍するが勘忍」という外交的決着で、論議

科書修正要求を呑（の）む分析に力を注がせる。岡田英弘は、中国内部で軍部と鄧小平ラインとの権力争いが生まれ、教科書問題は、反日キャンペーンを引き起こして鄧ラインにゆきぶりをかける軍部の策謀であるとする。教科書検定は中国の内政問題だ（『中央公論』一〇月号）。中嶋嶺雄は、同じように教科書問題が「日本軍分の体験にもつて述べている（前掲論文）ように、文部省が「侵略」を「進出」と書きあらためさせようとしてきたのは、すでに二〇年以上も昔からのことであり、中韓両国をはじめとするアジア近隣諸国は、その文部省、すなわち日本政府の態度を完全に棚上げにして、日本だけが侵略や虐殺の責任を問われるいわれはないと開き直っているおぞましい「ホノネ」が支配しているためもあるだろう。しかし、アジア侵略の事実を認め責任を反省している人たちの間でさえ、保守派の雑誌のあちこちで散見されるように、子どもにも自国の過去の悪業を正しく教える必要はないというものが、広く支配している心理なのである。そこからまた、外国による教科書批判は「内政干渉」だという感覚が生まれてくる。

根幹突かず開き直り

教科書問題と保守派イデオログ 中韓の政情分析に力点



渡部 昇一氏



小堀 桂一郎氏



中嶋 嶺雄氏



ぬきに事態を政治的に棚上げ（こじ）しようとしていると見られるも仕方ないだろう。

「犯人」探しに傾斜

保守派のイデオログたちの焦立ちを端的に示しているのは、『諸君』一〇月号の特集である。ここで渡部昇一は、教科書が文部省の検定強化によって改定されたという事実をひとつと、外交問題にまで発展した今回の教科書問題は、外庄をつかって日本政府をこまらせてやうとしたマスコミの「虚報」から発したと述べている。鈴木首相が訪中したため、土下座外交を甘受して、外国による教

た「犯人」探しへと向かってゆく。渡部や小堀の文章においては、マスコミや日教組あるいは野党議員などが「犯人」ととき、一部では公然と復活した「国賊」呼ばわりで指弾されているのは、そのひとつのあらわれに他ならない。他方では、それには他ならない。他方では、それは教科書を今さらのように問題化した中韓両国の政治事情の

問題の「核心」なのだ。保守派の論客によるこうした「政治事情」の分析には、それなりに聴かなければならぬ指摘も多い。今年の歴史教科書で、中国への「侵略」がいっせいに「進出」へと変えられたと受けとらせるような新聞の報道は、明らかにミス・リードインだ。たが、（もっともアジア全体の記述については、変えられた例がないわけではない。『週刊朝日』九月一〇日号の再調査参照。また、ひとつの問題が「政治問題」化するには、そこに固有の口実があり条件があるのは、すべての政治的分析が示す通りなのである。

「自由」一〇月号）。しかも韓国では、すでに日本の教科書記述は、長年にわたって研究調査され、それをふまえて韓国政府は、七九年から日本

政府に是正の要求をたびたびしてきたが日本政府は「二度も誠意ある答えをしめさなかった」という（金学鉉「教科書問題と〈友好〉の虚構」『世界』一〇月号）。そして教科書問題がひとたび「政治問題」として火がついたとき、中韓両国民衆の憤激と対日感情の悪化は爆発的だった。そこには、国家間の「友好」という取りつくりの下に塗りこめられていた潜在的な対日不信の民衆意識が、はつきり見えたときさまざまな特派員のレポートは伝えている。

芥川龍之介とA・フランクス ◆ 大塚 幸男

芥川龍之介がア・フランクスを「お師匠さん」(大佛)として、いかにその影響を受けているかは周知のとおり

河に投身しようとしてゐる。しかし僕は不幸にもかう云ふ友だちを投げて哲学的に死のうと降りて

研究ノート

(立教大学教授・政治学)